

## サメの歯と天狗

松山 知明

神奈川県川崎市

「天狗の爪」と検索を入れると幾つかの記事がヒットしてくるが寺院関連と化石関連のものである。天狗の爪と云われているものは実は古代のサメの歯の化石である。このサメは400万年から2500万年前に生息していたカルカロドン・メガロドンという15メートルほどの巨大魚であった。写真を見ると確かに爪のように見えなくもない。

神奈川県藤沢市の時宗の総本山清浄光寺（遊行寺）にもこの「天狗の爪」は寺宝として伝わっている。筆者は先日実物を見学するためにこの寺を訪れたが寺宝という事で公開はされておらず見ることはできなかった。

この化石はどこで採集されていつ誰が何の目的でこの寺まで持ってきたのだろうか。

遊行寺の事務所で話を伺うとかつて修験者が持ち寄ったということであった。そうだとすると寺と修験者はどのような関係だったのだろうか。またこの「天狗の爪」はどのような意味があったのだろうか。

遊行寺の他には岩手県平泉の中尊寺や愛知県宝飯郡音羽町の龍源寺に同じものが伝わっている。龍源寺の縁起では源義経が鞍馬寺から持ってきたと云われており、どちらも義経関連であるのが大変興味深い。

これらの寺院と修験者をつなぐ物として天狗の爪はどのような役割を果たしたのであろうかを次のように考察してみた。

- 1, 天狗の爪は寺院にとってどんな価値があったのか
- 2, 修験者は天狗の爪を持ち込むことでどのような見返りを得たのか
- 3, モノとしてのサメの歯

1については鎌倉以降の仏教は貴族だけではなく民衆の帰依を獲得するべく各宗派が競争をしていた。そして宗教的威光を示すために天狗という最大の威力を利用したのではないか。天狗とは辞書によると深山に住むという妖怪。山伏姿で、顔が赤くて鼻が高く、背に翼があり、手には羽団扇（はうちわ）・太刀・金剛杖を持ち神通力がある、自由に飛行するという。鼻の高い大天狗や烏天狗などがある。各地に天狗にまつわる怪異な話が伝承されており、山中で起こる種々の不思議な現象は、しばしば天狗のしわざであるとされる。

2 修験者は民衆への加持祈祷によって生計を立てていた。そこで有力寺院と近い関係を持つことでその寺院の檀家に対して加持祈祷を行なう縄張りの権利（かすみ）を得ていたことが考えられる。

3 また写真を見れば明らかであるが、天狗の爪という威光もさることながら、この固く黒く重い物質の質感、印象はヒトにとって何か特別な感覚を惹起するものと思われる。

ヨーロッパでは同じ化石が「グロッソペトラ Glossopetrae（舌石）」という名前で鳥の舌が石になったものと考えられていた。またこの化石の由来が明らかになる以前の中世では、化石は、秘密めいた効能を持つ薬として珍重されていた。それは解毒作用と悪霊払いの効能があるとされ、当時の食卓には「舌吊り台」という石の舌を吊るす台が置かれた例がある。

他方、デンマークの解剖学者ステノ（1638～86）がこの舌石をサメの歯であることを解明したことによって地質学の扉が開かれることになる。ステノは耳下腺管の名前になっている。

一方生物の歯という事ならば人類学的にはクジラの歯が貨幣や飾りとして機能していた地域がある。ソロモン諸島ではクジラの歯をつないだ首飾りが見られる。

歯というものは臓器の一部として身体的に必要欠くべからざるものであるが、身体から外れ、独立した1つの物体としてもヒトにとって何か呪術的な、不思議なモノとして機能し、立ち現れている。天狗の爪は日常世界と非日常世界、異界を結ぶ媒介物であると考えられる。